



居住福祉 社会へ

「老い」から
住まいを考える

HAYAKAWA, Kazuo

早川和男

岩波書店



居住福祉 社会へ



「老い」から
住まいを考える



HAYAKAWA, Kazuo

早川和男

岩波書店

居住福祉社会へ「若い」から住まいを考える

2014年7月25日 第1刷発行

著者 はやかわかずお
早川和男

発行者 岡本 厚

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話案内 03-5210-4000
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・精興社 カバー・半七印刷 製本・三水舎

© Kazuo Hayakawa 2014
ISBN 978-4-00-025986-6 Printed in Japan

〔R〕〈日本複製権センター委託出版物〉 本書を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書をコピーされる場合は、事前に日本複製権センター（JRRC）の許諾を受けてください。

JRRC Tel 03-3401-2382 <http://www.jrre.or.jp/> E-mail jrre_info@jrre.or.jp

老驥伏櫪
志在千里

老驥伏櫪
志在千里

辛未秋保曹操句賀
吳川和男先生筆中

三行書堂主人

陳昌臣



早川和男(はやかわ・かずお)

1931年、奈良市生まれ。京都大学工学部建築学科卒。日本住宅公団技師、建設省建築研究所住宅計画・都市計画・建設経済各研究室長、英国国立建築研究所・アーヘン工科大学・ロンドン大学経済学部客員研究員、天津大学客員教授、神戸大学環境計画学科教授、日本住宅会議事務局長、国際社会学会(ISA)住宅・環境特別委員会理事、長崎総合科学大学特任教授、日本福祉大学客員教授等を経て、現在神戸大学名誉教授、日本居住福祉学会会長、国際居住福祉研究所長、居住福祉塾代表、国際長寿センター・高齢社会をよくする女性の会理事、きらくえん後援会長他、日本都市計画学会賞、日本生活学会・今和次郎賞、毎日二一世紀賞、久保医療文化賞、建設大臣業績表彰。

著書：『空間価値論——都市開発と地価の構造』(勁草書房)、『土地問題の政治経済学』(東洋経済新報社)、『新・日本住宅物語』(朝日選書)、『住宅貧乏物語』『居住福祉』(岩波新書)、『住まいの処方箋』『土地と住まいの思想』(情報センター出版局)、『国土と人権』(西山卯三他編、時事通信社)、『居住福祉の論理』(岡本祥浩共著)『講座 現代居住』(全五巻編集代表、東京大学出版会)、『学問に情けあり』(西山卯三共著、大月書店)、『災害と居住福祉』『権力に迎合する学者たち』『早川式「居住学」の方法——五〇年の思索と実践』(三五館)、『人は住むためにいかに闘ってきたか』『居住福祉資源発見の旅Ⅰ、Ⅱ』『居住福祉の世界——早川和男対談集』(東信堂)、『災害に負けない「居住福祉」』『ケースブック 日本の居住貧困——子育て／高齢障がい者／難病患者』(編集代表) (藤原書店)他。

目次

序章 住まいの風景	1
-----------	---

第1章 生きる——「老い」と人生	15
------------------	----

1 人として生きられる住環境	17
2 老人問題と子どもの発達	32

第2章 「老い」と住まい	43
--------------	----

1 居住の安定が高齢者を豊かにする	45
2 在宅福祉が困難な日本の住まい	63
3 コミュニティの中で住む	81

第3章 安居楽業——「安居」と「楽業」は車の両輪	89
--------------------------	----

1 「主」になれる住まい	91
--------------	----

2	家族の器・労働の基地	99
---	------------	----

3	老いの価値と労働の質	107
---	------------	-----

4	雇用と住居	111
---	-------	-----

第4章 災害復興と住民……………121

1	阪神大震災の教訓	123
---	----------	-----

2	災害復興の論理と課題	130
---	------------	-----

3	住まいの復興	135
---	--------	-----

4	鎮守が復元されなければ村にもとらない	142
---	--------------------	-----

5	地域の「居住福祉空間」への改造	149
---	-----------------	-----

6	「原発」にどう立ち向かうか	155
---	---------------	-----

第5章 「居住福祉社会」をめざして……………163

1	人権と民主主義に根ざした居住政策	165
---	------------------	-----

2	居住民主主義	172
---	--------	-----

3	「予防的社会保障」の提起——住宅貧困の社会的費用を減らす	182
---	------------------------------	-----

4	不動産・住宅産業から「居住福祉産業」へ	186
---	---------------------	-----

5	住教育改革・発展の必要性	190
---	--------------	-----

附 録	195
1 日本住宅会議の設立	195
2 日本居住福祉学会の設立	200
3 日中韓居住問題国際会議	201
あとがき	207

序章
住まいの風景



鴨長明「方丈庵」(下鴨河合神社境内で復元)

人と住まい

鴨長明『方丈記』は、「仏教的無常観の書」、あるいは「安元の大火」「治承の辻風」「福原遷都」「養和の飢饉」「元暦の大地震」などの「災厄」をリアルに描写したことから「災害文学」とも呼ばれている。一方、『方丈記』には住まいの話題が多い。長明は「災いの多い京中に大金をかけて住まいを作り、そのためにいらぬ憂いに神経をすり減らす、これほど馬鹿馬鹿しいことはない」などといい、方丈(約五畳)の庵に住んだことはよく知られている。「方丈記は「人と住まい」の物語でもあります」と、小林一彦・京都産業大学教授は解説されている。同感である(『NHKテレビテキスト』二〇一二年一〇月)。

また、堀田善衛さんの『方丈記私記』(ちくま文庫)には「ここでふたたび、いや、ふたたびどころではなくて、はじめからその話——住居にかかわってのことばかりなのだが、住居論——ここでは草庵に限ってのそれが出て来る」とある。

それで長明にならって、私も「人と住まい」について、改めて考えてみようと思う。長明の住まいは「方丈の庵」というが、まわりにはひろく自由に出入りできる自然にかこまれた「生活空間」があった。それに対し、コンクリートの壁でかこわれたわがマンションの侘しきことこの上なし。豊かな発想などの出ようはずもないのだが、ただひとつ長明と私の共通点は家がともに神社であったこと。

長明は神社を継げなかったのだが、私は神社を継がなかった。そのことへの後悔が、近年頻りである。そして、「私が以下に語ろうとしていることは、実を言えば、われわれの古典のひとつである鴨長明『方丈記』の鑑賞でも、また解釈でもない。それは、私の、経験なのだ」(堀田善衛、前掲)という思いである。

神戸に住み阪神大震災を経験した私は、その後、鳥取県西部、新潟県中越、新潟、能登半島沖、宮城・岩手、北海道南西沖(奥尻島)、福岡県西方沖(玄界島)、東日本、淡路島といった大震災、有珠山、三宅島噴火等々の被災現状や復興過程の調査に、ときにはなんども出かけた。そのたびに、「住むことは生きること」であることを痛感した。とりわけ超高齢社会であるわが国にとって、住まいの安定は人間生存と福祉の基盤としての役割がきわめて大きい。

どこの国、どこの街や村であろうと、人はすべてこの地球上に住んで生きている。それは、原始の時代から、人類の長い歴史をつうじて、人びとの自然界への働きかけと社会的営みによって実現してきたものである。猛獣や雨風、寒暑を防ぐために、樹上、横穴、堅穴などに住居をつくり、田畑を開墾して作物をつくり、海に出かけ漁獲物を得るなどして生きてきた。また、労働と生活の共同体としての集落をつくり、助けあうことで暮らしてきた。そのような経過を見ると、人間生存の歴史はこの地球上にいかに住むかという居住の歴史といって差し支えない。

その間、人類は飢餓の克服、伝染病の撲滅、奴隷の解放、戦争の抑止、人権や平和の確立など、それぞれの時代の危機をのりこえることに努めてきた。

そうした中で二一世紀は居住の安定が中心課題の一つになるだろうと、私は考えている。宗教戦争、民族紛争、外国軍隊の爆撃や侵略等々で家を失い土地を追われ路上をとぼとぼと歩く難民、ふえ続けるホームレス、南方・北方材の大規模伐採による住民の生活・環境破壊、地球温暖化などを見ると、人間が生きていくうえでの居住の意味、そしてそれは平和や地球環境維持と密接に関わっていることがわかる。住まいは人間生存の基盤なのである。

住居はまた、テレビなどの個人的生活財と違って社会的存在である。劣悪な住居や居住環境は、感染症、火災その他の災害の発生源と拡大、人心と地域の荒廃、犯罪の温床等々につながる可能性がある。現代日本社会の人びとの心の荒み、いじめ、不登校、家庭内・校内暴力、乳幼児への虐待、親子殺し、ゆきずり・衝動殺人、ネグラを求めての犯罪……人心を凍らせるような、かつては考えられなかった事件多発への影響を見ないわけにいかない。

それについて、中国古代の思想家・孟子の言葉は胸に響く(孟子『尽心章句上』)。

「居移気、養移体、大哉居乎」(住居は精神の状態を左右し、食べ物は身体の状態を左右する。住居の力は偉大だ)。

先人の思い

はじめに、住まいについての先人の思いをいくつかあげてみよう。

例えば、あまり知られていないが、詩人・石川啄木の詩に「家」がある（斎藤三郎編『石川啄木詩集』
角川文庫）。

家

石川啄木

今朝も、ふと、目のさめしとき、

わが家と呼ぶべき家の欲しくなりて、

顔洗ふ間もそのことをそこはかとなく思ひしが、

つとめ先より一日の仕事を了へて帰り来て、

夕餉の後の茶を啜り、煙草をのめば、

むらさきの煙の味のなつかしさ、

はかなくもまたそのことのひよつと心に浮び来る――

はかなくもまたかなしくも。

（中略）

この幾年に幾度も思ひしはこの家のこと、

思ひし毎に少しづつ変へし間取りのさまなどを

心のうちに描きつつ、

ランプの笠の真白きにそれとなく眼をあつむれば、

その家に住むたのしさのまざまざ見ゆる心地して、

泣く兒に添乳する妻のひと間の隅のあちら向き、

それを幸ひと口もとにはかなき笑みものほり来る。

(後略)

貧しかった啄木が、いかに「わが家」の暖かさを夢見ていたかが偲ばれる。

文豪アンドレ・ジードの伯父で経済学者シャルル・ジードや、経済学者ジョン・スチュワート・ミルは言う。

「食物着物にありましては、麦飯を喰い、羽織はなくとも、立派な生活が出来ましょう。いや、有名なお伽話には裸の王様さえ在ったではありませんか。然し豚小舎に住んで幸福と感じ威厳を保つ事は絶対に不可能であります」(加藤国一郎訳『住宅経済学』高陽書院)。

「人間が大きな氣宇を養うのに、その住まいの大らかさ自由さくらい大きな力をおよぼすものはない」(朱牟田夏雄訳『ミル自伝』岩波文庫)。

ドストエフスキイの小説『罪と罰』（池田健太郎訳、中公文庫）の主人公ラスコーリニコフは、金貸しの老婆に一撃をふるったあと、恋人のソーニヤに語る。

「君は僕の部屋へ来たから、見ただろう。……ソーニヤ、低い天井や狭い部屋は、頭と心を締めつけるもんだよ。ああ、僕はどんなにあの部屋を憎んだことだろう」。

「彼の部屋は高い五階建のアパートの屋根裏にあつて、部屋というよりは物置に近かった」。

日本の現状は、無数の潜在的ラスコーリニコフをつくっているのではないか。狭くて不衛生で乱雑な、あるいは孤立した空間におしこめられたときに人は、ものごとをじつくりと心の中にうけとめることができず、ちよつとしたはずみで衝動的行動に走ってしまう。情緒不安定や不幸せが目に見えぬ形で社会全体に襲いかかり、それがいじめやホームレス、弱者への暴力にまでエスカレートしているのではないか。仕事を失い、低賃金労働にあえぎ、あるいは日常の暮らしに苦悩し苛立つ人の心中も例外ではないだろう。

貝原益軒も住まいについて論じている（松田道雄責任編集『貝原益軒』中央公論社）。

「いつもいる部屋は、南向きで、戸に近く、明るいのがよい。陰鬱で暗いところにいつもいてはいけない。気をふさいでしまう。また光りすぎる明るいところも、時どきはよいが、いつもいては精神をうばわれる。明暗半々のところがよい」。

「風・寒・暑は人のからだをそこなうことはげしく早い。湿は人のからだをそこなうことおそく深い。だから風・寒・暑を人はこわがるが、湿気はこわがらない。湿にあたると、深く侵入してくる。湿のあるところから早く遠ざかるがよい。山間で川岸に近い所からは遠ざかるがよい。土が浅く、水に近く、床の低い所に座ったり横になったりしてはいけない。床を高くし、床の下に壁に窓をあけ、気の流通をよくする。あたらしく塗った壁の近くで座ったり横になったりしてはいけない。湿にあたって病気になる、なおりにくい」。

老後についても次のように記している。

「老後は、若い時の十倍の早さで時が過ぎていく。一日を十日とし、十日を百日とし、一月を一年として楽しみ、むだに日を暮らしてはいけない。老後はただの一日でも楽しまずに過ごすのは惜しい。老後の一日は千金に値する」。